

「方言の島」の語られ方

—山梨県奈良田集落とそのことばをめぐる言説—

小西いずみ(東京大学)

1. はじめに

奈良田は山梨県南巨摩郡早川町の北端の集落である。その方言が周囲の山梨西部方言とは異なる言語特徴、特に単語アクセント体系を持つことから、日本の言語学で「方言の島」の1つとされてきた。山梨西部方言は東京方言と同じくピッチの下降の有無・位置がアクセントの弁別特徴だが、奈良田方言では上昇の有無・位置が弁別の特徴である。

鼻(0型) [ハ]ナ [ハ]ナガ 雨(1型) ア[メ] ア[メ]ガ 花(2型) [ハ]ナ [ハ]ナ[ガ]

奈良田方言のアクセントを最初に記述したのは望月(1951)である。望月は奈良田方言が「周囲のものから孤立して特殊なものであることは、夙に伝えられていることで、この部落のアクセントが、果たして東京系統に属するものであるか、どうか、私は従前から関心を寄せていた」と研究の動機を記し、調査の結果「近畿系統アクセントに属するものであって、いわゆる「方言の島」を形づくっている」と結論づけた。その後、平山(1955)などが奈良田方言アクセントは山梨西部方言のアクセントから変化したことを論じ、「近畿系統」であることは否定されたが、共時的特徴から「方言の島」あるいは「音調の島」(平山, 1955)と形容されることは続けられてきた。

奈良田はしばしば「秘境」「仙境」と称され、また、奈良王こと孝謙天皇が一時遷居し、天皇帰朝後も残った人々がいたという伝承で知られてきた。3節で見ると、望月の論に先行する紀行などには「秘境」などの形容とともに奈良王伝説について記すものが多く、さらに奈良田方言の特殊性に言及するものもある。望月はこうした言説を見聞きしたのだろう。奈良王伝説は住民に今も尊重されており、奈良田方言が伝説と結びつけて語られることもある。長沢(1989)や深沢(1989)によると、奈良王伝説の原型は漠然とした都人であり、それが孝謙天皇遷居説になるのは早くとも18世紀末、そして伝説の流布に大きな役割を果たしたのが奈良田の外郎寺住職による『更訂孝謙天皇御遷居縁起抄』(1938/明治24; 以下『縁起』)とそれを簡略にして登山客などに配布したという小冊子である。

以上のように奈良田が「方言の島」と表象される背景には、「秘境」としての表象や奈良王伝説、それらの流布がある。本発表では、奈良田とその方言がどのように表象されてきたのかを非学術的なテキストから検証する。

2. 方法

近世以降成立・刊行の史資料における奈良田やその方言の言及箇所を抽出し、集落や方言がどのように形容されているかを整理する。現段階では(1)西山村総合学術調査団(1958)等の文献目録掲載資料、(2)国立国会図書館デジタルコレクションの「ログインなしで閲覧可能」「送信サービスで閲覧可能」資料¹を対象にしている。本発表ではこのうち近世～昭和20年までの紀行・随筆および地誌の類を対象とする。

対象資料のうち奈良田集落に対する評価的形容や端的な惹句を含む資料は58件、奈良田方言に対する言及を含む資料は26件である。表1にいずれかに該当する資料を示す。表の「集落」「方言」欄には、集落に対する形容や集落を表す惹句、方言に対する形容を、それぞれ次のように分類したものを記す。

集落の形容 a:「山村」「寒村」「僻地」「甲州最奥」など地理的周縁性や経済・文化的遅滞性の表現, b:「秘境」「仙境」「別天地」「原始郷」「人外境」など神秘性を喚起する表現², c:「伝説の村」など奈良王伝説に関連づける表現, d:「甲州(甲斐)の五家庄(五箇庄)」, e:「奈良田の里(郷)」, 他: 気候や規模など

方言の形容 ア: 言語の相違に対する直感的感想, イ: 周辺地域方言との非連続性への言及, ウ: 著者との意思疎通の困難への言及, エ: 古代語・近畿方言との関係への肯定的言及, 他

¹ <https://dl.ndl.go.jp/> (2023.1.9 閲覧) において「奈良田」で検索し、その結果を目視で確認した。現段階では図書館内限定で閲覧可能な資料は(1)の方法で得たもの以外は非対象。

² 奈良田集落から約6km離れた西山温泉に「秘境」などb類の形容をしているものもある。表1では奈良田がその被形容対象に含まれていない場合はbと認定していない。

表1. 紀行・随筆・地誌における奈良田集落と奈良田方言の形容表現の類型

著編者	タイトル	刊行年	ジャンル	集落	方言
1	柳沢淇園	ひとりね	紀行		ア
2	野田成方	裏見寒話	紀行	a	
3	大森快庵	甲斐叢記	地誌	a	
4	松平定能 他編	甲斐国志	地誌	a	
5	中村南溪(宗策)	日本風俗誌	紀行	a	イ
6	山中共古	甲斐の落葉	紀行	a 他	
7	田山花袋 編	新撰名勝地誌巻2 東海道西部	地誌	a	イ
8	原口亨	赤石白峯山脈縦横記	紀行	a	
9	大町桂月	七面山より駒ヶ嶽へ	紀行	bd	
10	横山又次郎	世界の反響	随筆	a	
11	松川二郎	全温泉案内	地誌	d	
12	日本旅行協會	温泉案内	地誌		
13	向笠潜	九大旅行部第三版南アルプス登攀記	紀行	他	
14	流石英治 他著	日本南アルプスと自然界	紀行	a	エ
15	平賀文男	日本南アルプス	紀行	b	ウ
16	小寺融吉	をどり通	紀行	b	
17	青木純二	山の伝説日本アルプス篇	地誌	c	
18	仲摩照久 編	日本地理風俗大系 VII	地誌	a	
19	今村是龍	身延と傳説	随筆	c	
20	茂木慎雄	甲州奈良田の人々	紀行	b	エ
21	菊池山哉	甲州奈良田の人々(續)	紀行		他
22	平賀文男	南アルプスと其溪谷 時間記録と費用概算	地誌	a	
23	池田博	山へ溪谷へ	紀行	c	ウ
24	金星堂編集部 編	登山・キャンプ適地案内	地誌	c	
25	青木良保	甲斐白峯へ登る	紀行	a	
26	磯貝正治	白峯三山の印象	紀行	他	
27	進脩社 編	信濃の誇り	地誌	ac	
28	今井徹郎	山は生きる	紀行	b	
29	鈴木覚馬 編	岳南史 第3巻	地誌	b	
30	茂木慎雄	南アルプス奈良田の話山のロマンス	紀行	c	ア他
31	平賀文男	赤石溪谷	紀行	ab	エ
32	国民通信社地方自治調査会 編	新撰風土記	地誌	b	エ
33	穂積重遠	朝鮮遊記	紀行	a	
34	中島英治	甲斐の森林美と西山温泉	紀行	b	エ
35	村雲大撰子	西山温泉	紀行	e	
36	八木貞助	赤石山塊の地形及地質概観	紀行	a	
37	小屋忠子	法皇山の傳説	随筆	bc	イエ
38	渡辺公平 他著	白峰三山南アルプス	紀行	abc	ウ
39	古川金一郎	南アルプス・山の旅	紀行	c 他	ウエ
40	村松蘆洲	甲斐から駿河へ	紀行	c	エ
41	小尾保彰 編	山梨県名勝案内	地誌	be	
42	小野幸	山村奈良田風景	紀行		他
43	横山又次郎	南アルプス横断の思ひ出	紀行	b	
44	井伏鱒二	避暑地 ABC	紀行	b 他	アウ
45	松川二郎	全名勝温泉案内	地誌	d	
46	温泉調査会 編	療養本位温泉案内関西篇	地誌	d	エ
47	山梨県師範学校 他編	綜合郷土研究	地誌	ab	イエ
48	内外新聞通信社	躍進山梨・静岡県総覧	地誌	c	
49	細井吉造	伊那谷木曾谷	紀行	ab	ウ
50	井伏鱒二	七面山所見	紀行	b	
51	稲葉充	雪線の人	紀行	a 他	
52	茂木慎雄	夏山の新コース	紀行	c	
53	望月春江	甲州西山不動龍	紀行	b	
54	松川二郎	主治病本位温泉地案内	地誌	d	
55	三田尾松太郎	山を愛して二十年	紀行		ウ

56	鈴木孤籥	南アルプス	1939/S14	紀行		アウ
57	羽中田誠	作家の眼 文化映画の方向に就いて	1940/S15	随筆	a	イ
58	南賢治	写真紀行旅とふるさと	1942/S17	紀行	ac	エ
59	島田武	甲斐の山々	1942/S17	紀行	b	
60	小西民治	山に悟る	1942/S17	紀行	a	
61	小野政方	甲斐風土 随筆紀行	1942/S17	紀行	b	ウ
62	高橋秀三	甲斐の祕境西山温泉行	1943/S18	紀行	c	
63	望月春江	早川林道	1943/S18	紀行	c	
64	東京鐵道局編	鍛えよ銃後の秋 山野跋涉!	19--(不明)	地誌	bc	

3. 考察

3.1 集落の形容：「秘境」としての位置づけ

表1「集落」欄から、成立が早い資料ではa「山村」「僻地」など地理的周縁性や経済・文化的遅滞性の表現が選ばれているが、大町桂月の紀行[9]以降、b「秘境」「別天地」など神秘性を喚起する表現が多く用いられるようになった事が分かる³。[9]は類型d（肥後の「五家庄」になぞらえる表現）の嚆矢でもあり、[11]など4資料（内3つは同一著者）は[9]をふまえたと推測される。[9]や[9]以前のaの表現、[9]以後のb、dの表現を含む資料を引用する。

[2] 此山の奥に奈良田村・湯島村杯いふ有。此村の人は昔より甲府へ出る事なく、文學も知らず。

[9] 山中の別天地 甲州の奈良田は、肥後の五家庄也。一萬尺の白根三山を西にし、六千尺内外の高山、丸山、源氏山の連山を東にしたる早川溪谷中、膚寸の地、海拔二千七百三十尺の別天地也。（略）奈良田に入りて、先づ御符水と称する清泉に迎へられたり。（略）山より出づる水には靈泉もある也。奈良田には、この靈泉あり。益天恵也。

[11] （引用者補：西山温泉の）上流三十町に「甲州の五箇庄」と稱せらるる奈良田部落あり、一村五十戸悉く深澤姓を名乗る。

[16] 南巨摩郡西山村の奈良田といふ山の中の村は、人外の別世界だが、家々に琴、三味線、笙を備へて、歌と踊が寂しい生活を慰めてゐる。

[34] 西山温泉を去る里餘早川上流に原始郷奈良田がある。人情風俗言葉遺等奈良の雅人の詞が交つて居る。茲に奈良田七不思議と云ふものがある 第一、御符水（以下略）（二重線部は方言の形容）

[59] 奈良田は白根への門戸としても有名であるが、秘境としてそれ以上に著名である。

奈良田が奈良王伝説とともに言及されるのは近世の紀行・随筆から見られるが、昭和初期にはd「伝説の村」「奈良王旧跡の地」など奈良王伝説が集落を表す惹句として用いられる。この頃には奈良王=孝謙天皇との認識が定着しており、奈良田を奈良王伝説とともに紹介する資料が多い。『縁起』やその簡易版の流布の結果だと考えられる。

[17] 奈良田村（白根山）—南アルプスの雄峰— 白根山脈と相對する西山の奥に傳説の村、奈良田がある。

e「奈良田の郷（里）」を含む資料は表1では2例だが、調査範囲を広げることで多くみられる可能性がある。名詞句「Xの里」は、現在、山村・農村の行楽地を表す慣用語だと思われるが、その語誌は不明である。

3.2 方言の形容：民間言語起源説の成立

[1]柳沢淇園「ひとりね」は奈良田の言語的側面に言及した最古の資料である。現早川町南部の雨畑集落と奈良田の方言が他の山梨西部域と異なることを、「おかしき」という評価形容詞で記している。[1]を含め近世～明治期のものは類型ア（言語の相違に対する直感的感想）、イ（周辺地域方言との非連続性への言及）に限られる。

[1] 女も、北山・積翠などの女は猿の如し。一里へだて、城下の町は、言葉もあまりく江戸に替らぬ所あれども、ひゞきにあぢなる所多し。奈良田[所の名也]・あめばた[所の名なり。此処より黄金おびたゞしく出る也]の人は山中にて、ものいひおかしきやうなれど、又左にてもなし。女坂・かしやう坂・庄司・もとす[何も所の名也]の人は、

³ ある地域が「秘境」と表象される過程については関戸(2013)の長野県秋山郷、朝倉(2014)の徳島県東祖谷の研究がある。

すべて羅刹の如く。男女のみわけ成りがたしといふほどの事。([] 内は割書)
[5] 言語も隣村の人と雖も解し難し。

昭和期にはウ（著者との意思疎通の困難への言及）、エ（古代語・近畿方言との関係への肯定的言及）が現れる。ウの例は次のようなものである。ウがイより遅れるのは、登山者・旅行者が集落に入り奈良田方言話者とコミュニケーションをとること自体がかつては少なかったためであろう。高年層とは意思疎通が成立せず青年層以下とは成立するという記述は[55]のほか[23][39][44]にもあり、昭和初期の奈良田の言語状況の一端を伝えていると思われる。

[15] 人夫定さんと平作爺さんは頻りに漫談を交換しているが例の人外境奈良田の言葉故聴いてみて毫も解らない。
[55] 懐かしい人家を見、老は何処かで茶を沸かして貰ひ、ゆつくり昼飯を撰つてはどうかと言ふ。自分も望むところ、
早速農家に這入つて頼んだが、頓んと言葉が通じない。仕方なく途へ出ると青年に出遭つたので、此人に頼むと（略）

エは、集落形容の類型 b（神秘性喚起表現）、c（「伝説の村」等）と同時か少し遅れて現れる。集落の形容として b、c を用いない資料でも、奈良王伝説を紹介した上で奈良田方言をエのように表象するものが多く、[58]のように言語以外の習俗等の洗練を述べる資料も複数ある。奈良王伝説が定着し、集落がその伝説とともに認知されるようになるという過程を経て、奈良田方言のルーツが古代奈良の言語にあるという民間言語起源説が成立したと言える。こうした外部者の認識・語りと奈良田方言話者のそれとの前後関係については確かめる術がないが、相互に影響しあったと考えるべきであろう。そして、奈良田住民・奈良田方言話者にとって、奈良王伝説は集落と方言に対するポジティブな態度を形成するよう作用してきたと言える。

[14] 殊に奈良田は千有餘年前の風俗慣習と、古典的の言語とを保存し、人類學上からも歴史上からも幾多の研究題目を與へてゐるのである。

[58] こんな辺鄙な山里に似合わず、家の周りには小庭を作り、（略）どうみても、たゞの山村とは違つてゐると思ひました。又この村人は歌舞音曲を愛し、婦女は三味線を嗜み、手芸などにもたけてゐるとのことです。村の女の子の吐いている草履をみても、布の寄せ切れにて色とりどりに美しく造つてあり、言語、風習なども變つてゐると聞きました。流石に時代は古くとも由緒は争はれないと思ひました。

4. むすび

本発表では、奈良田集落の「秘境」表象およびその言語のルーツが古代奈良にあるという言語起源説の成立について文献調査にもとづき考察した。対象とすべき資料はまだ残されており、さらに調査を進めて検証する必要がある。

長野県秋山郷など「方言の島」とされる地域の一部は「秘境」とも表象されるが、「秘境」表象が近代的な現象であることについては先行研究がある（注3参照）。奈良田以外の地域においても「秘境」表象と民間言語起源説が関わる事例があるかもしれない。こうした言説分析も広義の方言研究として成立しうるであろう。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 17K02777, 20H00015, 21K18376, 21H04351 の助成を受けている。

参考文献

- 朝倉慎人 (2014). 生活空間への観光のまなざしと住民の対応—徳島県三好市東祖谷地域を事例として— 人文地理, 66(1), 16-37.
- 関戸明子 (2013). 秋山郷における秘境イメージの形成と流通, 日本地理学会発表要旨集 2013s, 319.
- 長沢利明 (1989). 山梨の孝謙天皇伝説, 甲斐路, 67, 140-60.
- 西山村総合学術調査団 (1958) 西山村総合学術調査報告書 山梨県教育委員会
- 平山輝男 (1955). 言語島の音調体系成立とその解釈, 国語と国文学, 32(12), 44-57.
- 深沢正志 (1989). 秘境・奈良田 山梨ふるさと文庫
- 望月信彦 (1951). 山梨県奈良田部落のアクセントの研究—東西アクセントと比較して—. 寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸(編) 国語アクセント論叢 法政大学出版局 pp. 451-84.